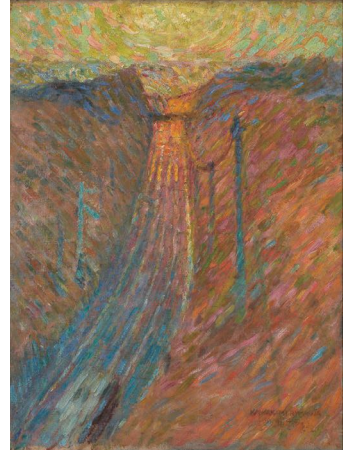


川上涼花(絵巻)一九二一年、油彩・カンヴァス東京国立近代美術館蔵



今回の展示では、郷土資料館の企画展示室に加え、共催の東京芸術劇場、特別会場に雑司ヶ谷鬼子母神堂の三つの会場で開催します。それぞれの会場で作品と出会い、また会場を移動しながら、池袋の街並みも楽しんでいただけることでしょう。

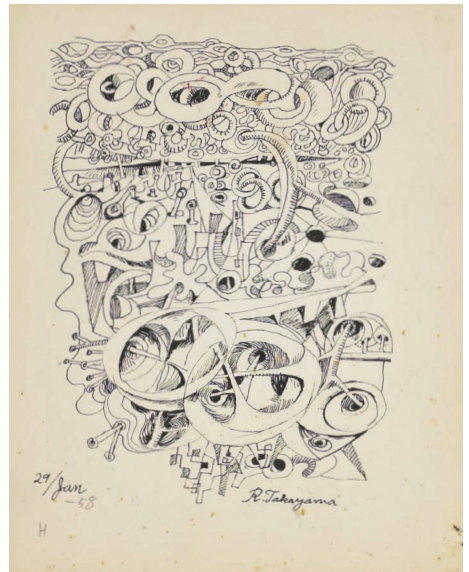
限りある紙幅のため出展作品の中から選りすぐりの六点をご紹介します。また、関連事業も多く予定しておりますので、そちらもご期待くださいませ。

【展示構成】

- 1章 森山大道
- 2章 戦後池袋―混沌の記憶と子ども
- 3章 池袋モンパルナス、大正、明治、江戸
- 4章 雑司ヶ谷鬼子母神堂



小熊秀雄(すみれ)一九三〇年代、水彩・インク紙豊島区蔵



高山良策(題不詳)一九五八年、インク紙豊島区蔵



《池袋駅東口ヤミ市模型》一九八四年、豊島区立郷土資料館蔵



鶴田吉郎(池袋の道)一九四六年、油彩・カンヴァス豊島区蔵



(美術) 小林未央子／堀口麗

森山大道「記録」三三号より 二〇一六年、インクジェットプリント 一般財団法人森山大道写真財団蔵

【関連事業】

- ・鬼子母神堂絵馬鑑賞会
二月一六日(火)、一七日(水)
- ・担当学芸員によるギャラリートーク
一月三一日(日)
- ・『にっぽん劇場写真帖』『記録』を手にとって見る 不定期

※諸事情により変更・中止する場合があります。予約方法、最新の情報には展覧会ホームページをご覧ください。

ミュージアム開設準備学芸グループ
www.city.toshima.lg.jp/128/
museumgroup.html
www.geigeki.jp

東京芸術劇場 www.geigeki.jp

セピア色の記憶

第36回 サンシャイン60が見てきたもの

左に示した二枚の写真は、ほぼ同じ地点から撮影した一九七七年四月（松井一彦氏撮影）と現在（二〇二〇年一〇月撮影）の雑司が谷二丁目の都電荒川線沿いの様子です。地図に示した*印は撮影地点を、↓印は撮影方向を示しています。

上写真左端に写る「大塚酒店」の記載を手掛かりに、当時の住宅地図を繰ってみると、雑司が谷三丁目に所在する大鳥神社の向かい側に「大塚酒店」の存在を確認。該当する踏切、すなわち撮影ポイントを特定することができました。



都電荒川線の背景に写るのは、工事中のサンシャイン60です。最上部のクレーン二基を使用して建設工事が進められていることがわかります。そして、写真撮影時のちょうど一年後となる一九七八年四月にサンシャイン60は開業しました。サンシャイン60は、文字通り60階建て、地上高二三九・七メートルの超高層ビルで、一九九〇年一二月に地上高二四・九メートルの東京都庁第一本庁舎が竣工するまで、一二年間にわたり日本一の高さを誇りました（下表参照）。

下写真からわかるように、今でこそ東池袋四丁目に所在する五二階建て、一八九メートルのアウルタワー（右側後ろ）、南池袋二丁目に所在する四九階建て、一八九メートルのプリリアタワー池袋（左側、豊島区役所が入るビル）といった超高層ビルがこの地にはそびえていますが、かつては圧倒的な高さを誇るサンシャイン60（中央）が、ランドマークの知名度の高さでは群を抜いていました。一方、上写真の都電荒川線の車両には、運転席脇にも人影が確認でき、大勢の乗

東京都で最も高い建築物の変遷（直近50年程度）

名称	東京一の期間	地上高	地上階数	所在地
霞が関ビルディング	1968-1970	156 m	36 階	千代田区
世界貿易センタービル	1970-1971	162.6 m	40 階	港区
京王プラザホテル	1971-1974	179.6 m	47 階	新宿区
新宿住友ビルディング	1974-1974	210.3 m	52 階	新宿区
新宿三井ビルディング	1974-1978	224.9 m	55 階	新宿区
サンシャイン 60	1978-1990	239.7 m	60 階	豊島区
東京都庁第一本庁舎	1990-2007	242.9 m	48 階	新宿区
ミッドタウン・タワー	2007-現在	248.1 m	54 階	港区

客が乗っていたことがわかります（もちろん撮影した時間帯にもよるでしょう）。統計的には、一九七四年の都電荒川線開業直後の乗降客数は一日平均約九万三千人だったのに対し、二〇〇〇年以降は約五万人前後で推移している模様です。この間、東京では新たな地下鉄の開業、新交通システムの導入などにより当該地域の交通インフラが整備されました。

都電荒川線の乗降客数の減少傾向は、多様化した交通手段と利便性の向上により、利用者が分散したためと言えそうです。サンシャイン60は、こうした交通インフラの変遷はもろろん、自らも参加する「建物の背くらべ」の様子を見てきたこととなります。（郷土 秋山伸一）

文学・マンガ資料紹介

やまたかのぼるくんぼう

山高登《薰風》

〜 版木に刻む都電の風景 〜



山高登《薰風》1990年
木版、紙 32×22cm
豊島区所蔵

副都心線・雑司が谷駅から徒歩数分、目白通りと明治通りが立体交差する地点に架かる千登世小橋※から、「鬼子母神前」停留場に向かう都電荒川線を眺める子供たち。この版画は、山高登（一九二六—二〇二〇）の《薰風》という作品です。山高は、戦後まもなく新潮社に入社し、井伏鱒二や志賀直哉、宇野千代などを担当した編集者でした。豊島区にゆかりの深い坪田譲治とも交流があり、坪田主宰の雑誌『びわの実学校』の表紙を、創刊号（一九六三年）から、終刊一三四号（一九八六年）まで描き続けました。

終戦後、広島県福山市から東京へ帰ってきたとき、自分の生まれたまちを「今のうちに記録しておかなきゃ」と思い、東京中の写真を撮って回りました。「ことに第二次大戦後の荒廃し切った日本をみてから、失われてゆく美しくひそやかな人のくらしが一層いとほしくなって、ひまをみつけては心のよりどころを求めて歩くようになった」（山高「ひとり旅」『歌壇』一九九二年一月）そのうち、撮影した風景を違う形で残したいと思い、編集の仕事の傍ら、独学で木版画の制作をはじめました。



2020年10月20日撮影

山高は、「経済の高度成長時代の会社の人使いは驚くほど荒っぽかったけれど、版画制作に没頭しているとどんな苦痛もどこかへ霧散してしまった。」（前掲）と振り返っています。

一方、社内では装丁も手掛けるようになり、次第に他社からも挿画や装丁の依頼が増え、個展を開くようになります。木版画に専念するため、五二歳で新潮社を退社し、東京を描いた作品は画集『東京昭和百景』にまとめられ、『薰風』も収められています。

本作では、線路を囲む緑と、都電を眺める子供たちの髪が風になびき鳥が飛び立ち、遠くに見える新宿のビル群が夕焼けに染まっていく様が表現されています。

今回、同じ場所から写真を撮影してみました（左）。夕日が沈む時間に合わせたのですが、多色刷りで表現される色の移ろいにはかきません。

線路の左側にはマンションが建ったものの、この千登世小橋からの風景は、橋が架設されたと考えられる昭和三

（一九二八）年頃から変わらず、人々の暮らしのそばにあります。版画の木の質感が懐かしさを感じさせる『薰風』の風景は、「美しくひそやか」に描かれています。（文学・マンガ 西方ゆり恵）

※千登世小橋については「かたりべ」一三三号参照。

【主要参考文献】山高登『東京昭和百景』シリーズ・プランニング、二〇一四年／『東京の編集者 山高登さんに話を聞く』夏葉社、二〇一七年／『昭和残影 木版画家・山高登がみつめた東京の風景』『芸術新潮』二〇一七年九月／川本三郎「編集者そして版画家、山高登が撮った昭和三十年代の東京。」『東京人』二〇一七年七月

現在、郷土資料館企画展示室で開催中の収蔵資料展「豊島区を走る都電」（2021年1月10日まで）では、松井一彦氏が同じ場所から撮影した、雪景色の都電の写真を展示しております。

松井氏の写真もまた、今は失われてしまった景色や、変わりゆく風景を捉えた貴重な資料です。

展示の中でお気に入りの写真を見つけたら、今の風景を探しに散策してみたいかかでしょうか。

館蔵資料紹介 扁額・高橋泥舟書「七言二句」



〔関房印〕 離離 細竹 時間 雨淡々 疎 篇累 陶百 壬午春日 為川名氏 囑 泥舟精 〔落款印〕

突然ですが、ご自宅に扁額はありますか？家に無くとも、どこかで見たことはあるのではないのでしょうか？

扁額の歴史は古く、紀元前二世紀の中国にまで遡り、元々は門戸に掛け、その家を表す意味を書いた板木を意味するものでした。そのため、日本でも古くから寺院や神社に掛けられた木製の扁額が見受けられ、都内での最古の例も鎌倉時代まで遡ります。しかし、紙本(和紙のこと)に書かれた横長の額が室内に掲げられるようになったのは日本が始まりで、十六世紀末頃からだと考えられています。尤も、二十一世紀の現在では応接室や校長室やらに掛かっている筆で書かれた額、という認識の方が多いでしょう。実際、館蔵の扁額の中には区有施設から移管された経緯を持つ資料も少なくありません。扁額を揮毫する(筆で書画を書くこと)には、当然ながらどのような語句を書くかが重要です。揮毫をする語句・詩歌の候補を列記した本は天保七年(一八三六)に幕末三筆の一人に謳われた市河米庵がまとめた『墨場必携』に代表され、再編・

新編など多数あります。さらに書家自らが詠じた詩歌や、席上揮毫で同席した詩人の詩など無数の選択肢があると言えるでしょう。その中から選ばれた語句には、書かれた当時の時代背景や、書いた人物の心境などが大きく影響しています。写真で紹介している館蔵資料の高橋泥舟書「七言二句」では、このような字句が書かれています。

離離細竹時間雨
淡淡疎篇累陶百
(離離たる細竹 時に聞く雨
淡淡たる疎篇陶の白を累る)

落款には「壬午春日為川名氏囑泥舟精」とあるので、明治十五年(一八八二)に川名某氏に宛てて揮毫されたことが判ります。ちなみに「精」とは高橋泥舟の名前である精一を表しています。

作者である高橋泥舟政晃は幕末には槍の名手として知られていました。山岡鉄舟の推挙で京都警備に尽力、戊辰戦争後には駿河に移封する徳川家の家臣団の一員として一時城主も務めますが、すぐに廢藩置県となり役目を降りることとなりました。その後、明治政府から出仕を求められたものの、勝海舟・山岡鉄舟にかけ、自分がかちかち山の「泥舟」である

から漕ぎ出さぬ、と自嘲と皮肉交じりに名乗ったのが始まりだったと晩年に語っています。泥舟の後半生は、諸国を回り文墨の世界の中に生きていました。書を揮毫するだけではなく、多くの和歌や漢詩を作っていますが、この詩もまた自作したものだと思います。

明治十年代後半は急激な近代化が進む一方で、戊辰戦争で戦った旧幕府側への恩赦や西南戦争の終結を経て藩閥政治への抵抗も起き、自由民権運動の高揚や徳川時代への回顧・追憶が始まったころでもありました。こうした中で、元幕臣であり高名な泥舟の元へも揮毫の依頼が舞い込んだものと思われれます。

書の作品として見れば、泥舟らしい「槍を突いて書いたよう」とも評される筆捌きの唐様書と日本風の漢詩からは明治中葉からの六朝ブームとは異なる、「江戸らしい」雰囲気伝わってきます。また、静謐な空間を思わせる内容からは、俗世との隔絶を望む文人の境地を味わうことができます。

ちなみに、企画展の特別会場となっている雑司が谷鬼子母神にも、泥舟書と伝わる扁額があります。もしかすると、すぐ傍にもあるかもしれませんね。

(郷土 井坂綾)

再現工作 自在鉤の仕組み

自在鉤とは、主に囲炉裏とセットで使う、鍋や鉄びんなどを吊るす道具です。

囲炉裏の火は火力調整をするのが手間であるため、火からの距離によって鍋にあたる火力を調整していました。

当館で所蔵している自在鉤を並べてみても様々な形状のものがあることが分かります。自在鉤には横木に魚の意匠があらわれているものも多く、その場合は横木を木鯛きだてといいます。火を使う場所ですら関係する魚を用いることで、火事にならないことを願ったものといわれています。



※当館所蔵の自在鉤

囲炉裏の上で火からの遠近を自在に調節できることから自在鉤といいますが、具体的にどのような仕組みになっているのでしょうか。ミニチュア自在鉤を工作しながらみてみることにします。

用意する素材は、竹串、細身のスト

ロー、魚型の醤油差し、

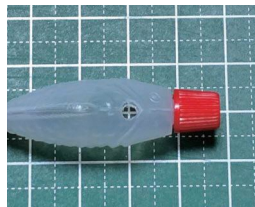
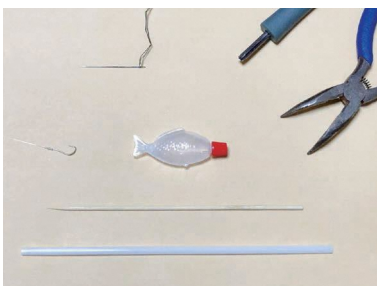
カギ状のもの（釣り針やフックネジなど）、糸です。

使う道具は、竹串を切る工

具（ペンチやニッパーなど）、小さな穴をあける工具（彫刻刀や細い丸ヤスリなど）、縫い針です。

下準備として、竹串の先端をペンチで切り、カギ状のものを取り付けます。カギに釣り針を使用する場合も、安全のためペンチで先端を切っておくとよいでしょう。ここでは竹串を少し削ってテグスをぐるぐる巻きにしました。

次に竹串がなめらかに通るように魚型醤油差しに上下二か所の穴をあけます。これらの穴が竹串に



引つかかること

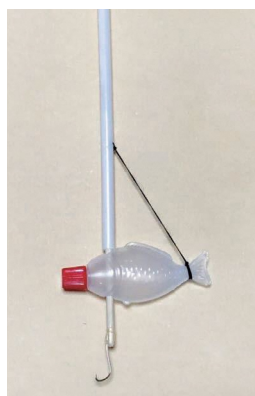
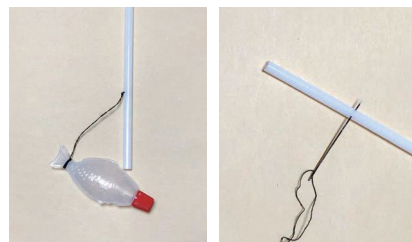
によって自在鉤の伸縮を固定するため、穴は竹

串がちょうど通る程度の大きさになるのが理想

です。あとはストローに糸を縫

い付け、魚型醤油差しのしっぽ部分に結んで、竹串の頭をストローの下からさしこめば完成です。

ミニチュア自在鉤では、魚の尾が糸で吊られることによって、頭が下を向こうとして竹串を押さええています。つまり、カギを引く力が強いほど、カギをとめる力も強くなる構造になっています。ミニチュア作成した自在鉤のカギを引っ張ってみても、その意外な力強さを体験することが出来ます。ストローがやわらかいため、どこにどのよう力が加わるかもよく分かります。（郷土 鄧君龍）



※ミニチュア自在鉤 完成品

編集後記

「かたりべ」一三八号をお届けします。豊島区では、二月一日を「としま文化の日」と制定し、一月三〇日まで、「としま文化応援プロジェクト」と題して、区内各所で様々な文化イベントが開催されました。

郷土資料館では、一月一日～七日の「としま文化推進期間」に、雑司が谷旧宣教師館・鈴木信太郎記念館と連携して、3館を巡るスタンプラリー「とら〜とら〜☆ミュージアム〜郷土の文化を感じる3館巡り〜」を実施しました。また学芸員による3館巡り☆ギャラリートークも同時開催し、好評のうちに終了しました。

来年一月からは、美術企画展「池袋への道」が始まります。どうぞご期待ください。（郷土 横山恵美）

かたりべ No.138

2020年12月11日
豊島区立郷土資料館
東京都豊島区西池袋2-37-4
としま産業振興プラザ7階
電話 03-3980-2351

URL
<http://www.city.toshima.lg.jp/bunka/bunka/shiryokan/index.html>

資料寄贈受入れの一時休止のお知らせ

資料移転及び準備作業のため
資料寄贈の受け入れを
2022年春頃まで、
一時休止いたします。

